

# 2017年度（第26期） 事業報告書

自 2017年（平成29年）4月1日  
至 2018年（平成30年）3月31日

公益財団法人 北海道新聞野生生物基金

## はじめに

2017年は当基金の設立25周年に当たり、メインの記念事業として「北海道フラワーソン2017」を、北海道新聞社の創業130周年記念と合わせて開催した。

1997年から5年ごとに実施しており、今回で5回目。過去最多の参加者数だった前回2012年並みの約3060人が参加した。6月17、18の両日、天候にも恵まれて参加者たちからも充実感がうかがわれ、北海道を代表する一大イベントとして成長してきたといえる。調査の成果をレポート（報告書）にまとめ、参加者全員に配布した。

また、これに関連して、25周年記念ネイチャーフォーラムとして、北海道出身の作家・谷村志穂さんの特別講演「北海道の野に咲く花に誘われて」とフラワーソン2017報告会を合わせて道新ホールで開催した。

## ◇収益事業（特別会計）

**一般販売用カレンダー事業（制作費）** 決算額 395万円（予算額 400万円）

「北海道野生生物写真コンテスト」の応募作品の中から秀作を選び、動物部門の大判吊り下げ型カレンダーと、植物部門の卓上型カレンダーを発行している。当基金のほか、主に道内の主要書店などを通じて北海道の野生生物を守る目的と願いを込め販売している。販売収入は前年度を少し下回ったものの、収益を公益目的事業会計に繰り入れることができた。

## ◇公益目的事業（一般会計）

**【普及啓蒙事業】シンポジウムなど** 決算額 73万円（予算額 70万円）

ネイチャーフォーラムとして「谷村志穂さん特別講演とフラワーソン2017報告会」を9月3日、道新ホールで開催した。谷村さんには実際にフラワーソンの調査に参加していただき、その時の映像を交え、フラワーソンについて語っていただいた。続いて3千人を超える参加者からの調査データをまとめた、さっぽろ自然調査館の渡辺修さんが成果を報告した。実行委員長の小川巖さんをコーディネーターに、実行委員の金子正美さん、函館地区アドバイザーの木村マサ子さん、渡辺修さん、谷村志穂さんの4人によるパネルディスカッションを行い、フラワーソンの意義を確認した。

## 【自然体験活動事業】

**（1）自然・環境出前講座** 決算額 54万円（予算額 80万円）

北海道新聞社との共催で当基金の評議員らが道内各地の学校・団体などからの要請により、小中学校や地域学習の場に派遣し、6講座を実施した。各会場では募金箱を置いて寄付を呼びかけた。旭川野鳥の会の招きで4月8日、寺沢孝毅さんの講演「魅せます！極地から熱帯まで、空中から海中まで」を旭川大雪クリスタルホールで開催した。北海道教育大学函館校の招きで8月1日、金子正美さんがマレーシア・サバ大学からの留学生6人と

ともに登壇し、「マレーシア・ボルネオ島における地域住民による生物多様性保全の取り組み」をテーマに話した。空知管内北竜町教育委員会の招きにより北竜町公民館の高齢者大学ひまわり大学で11月16日、寺沢孝毅さんが「魅せます！ 極地から熱帯まで、空中から海中まで」と題して講演した。北海道消費者協会エゾシカ連続講座の一つとして、苫小牧市民活動センターで11月30日、坂東元さんが「北海道の野生生物と共存する社会の姿とは」と題して講演した。日高管内浦河町教育委員会の招きにより浦河町総合文化会館で開かれた成人大学講座で11月30日、坂東元さんが「伝えるのは命の輝き」と題して講演し、会場に置いた募金箱に約2万7千円が寄せられた。札幌市立北野小学校の招きで12月13日、金子正美さんがマレーシアからの留学生キュー・イーホンさんとともに「マレーシアの文化、自然、生活について」と題し、3年生65人にボルネオ島の野生生物の危機などについて話した。

## (2) 自然・環境エクスカージョン 決算額 38万円（予算額 30万円）

当基金が主催ないし共催し、北海道新聞紙上の社告や広告などを通じて参加者募集などで後押しした。天売島野鳥撮影会は4月29日～5月7日、天売島で開かれ、ゴールデンウイークの渡り鳥や海鳥の宝庫の撮影で来訪したバードウォッチャーをサポートした。ふらっと南幌の100回記念フットパス&フォーラムに共催で加わり、6月18日、空知管内南幌町で開かれて約80人が参加、幌向運河などフットパス特別コース「歴史の道」を歩き、講演会や車座トークを行った。6月24、25の両日開かれた第25回全道フットパスの集いinさっぽろを共催し、初日は石山緑地や駒岡周辺のフットパスコースを歩いた後、講演会や報告会を開き、2日目は太平百合が原、手稲方面のコースを歩いた。NPO法人自然教育促進会主催の「親子エコキャンプ in 平取」は7月22、23の両日、日高管内平取町のニセウ・エコランドで開かれ、共催した。親子でテントを張ってヤマベ釣り、廃油ローソク作り、夜のホタルウォッチングなど夏休みの自然体験学習をした。天売島宇宙塾は8月4～7日、天売島で夏休みの小学3年生から中学3年生までを対象に自然体験会を開催し、海鳥の観察やカニ釣りなどを味わった。第26回全道フットパスの集い in ニセコは9月23、24の両日、後志管内ニセコ町との共催で実施。初日は文学歴史の散歩道コースと紅葉探索林道コースに分かれて歩き、小川巖さんと谷村志穂さんのトークショーも行い、交流会も開いた。2日目は開拓歴史を想うコースと山岳コースに分かれて歩いた。旧国鉄標津線フットパスツアーを共催し、10月8、9の両日、根室管内中標津町などで実施した。エゾシカフェスタ in 札幌は北海道消費者協会の主催で10月29日に札幌市内で開かれ、共催に加わった。プロに学ぶ撮影セミナー「野生生物撮影の極意ー生きものに寄り添う撮影方法」は2月3日に札幌市内で開かれ、日本生態系協会の協力要請で共催し、評議員の小川巖さんと嶋田忠さんが竹田津実さんとトークセッションを行った。

### (3) モーリーの森づくり

決算額 99 万円 (予算額 100 万円)

北海道新聞社との共同事業。昨年に引き続き「モーリーの森づくりⅡ」として7月2日、植樹地の空知管内栗山町で実施した。道新「まなぶん」子ども記者と小学生新聞OB、父母から希望者を募り、18人が参加した。植樹前に子どもたちは野鳥・動物グループと昆虫グループとに分かれ、それぞれ小川巖さん、大原昌宏さんの指導、解説で散策し、周辺 of 自然について学んだ。グループ・家族ごとに植樹したほか、来年以降の植樹用として種を植えて苗づくりにも挑戦した。植樹後は同町内の自然体験ハウスで、木笛作りに挑戦した。

## 【コンテスト事業】

### (1) 写真コンテストと写真展

決算額 110 万円 (予算額 100 万円)

7月から8月にかけて北海道の野生生物を対象に募集した第23回北海道野生生物写真コンテストには道内のアマチュア写真家219人(前年より35人減)から788点(同50点減)の応募があった。審査で選ばれた動物部門の入賞8点、入選18点と植物部門の入賞5点、入選11点は11月3日～8日、富士フィルムフォトサロン札幌で展示されたほか、「モーリー」48号で紹介した。

### (2) 夏休み自然観察記録コンクール

決算額 21 万円 (予算額 17 万円)

第24回夏休み自然観察記録コンクール(北海道新聞野生生物基金、北海道自然保護協会、北海道新聞社主催)には、道内24小学校から62点の応募があった。選ばれた入賞9点と佳作17点は10月31日～11月5日、札幌市資料館で展示した。金賞・銀賞などは道新子ども新聞「まなぶん」で紹介し、入賞・入選者は「モーリー」48号やホームページにも掲載した。

## 【出版事業】

### \*自然情報誌「モーリー」の発行

決算額 646 万円 (予算額 660 万円)

2017年の特集年間テーマを「北海道生きもの調査」とし、①の46号を6月に、②の47号を9月に刊行した。12月には道内に6つある国立公園を特集した49号を発行した。2017年より6月、9月、12月の年3回刊行としたことから、2018年3月は休刊。

## 【助成事業】

### (1) 助成事業

決算額 321 万円 (予算額 300 万円)

2017年度の一般助成は12団体、232万1700円、本年度から新設した「杉本とき鳥類保護助成基金」は3団体70万円で、総額302万1700円とした。申請件数は31件で昨年4月下旬に神谷忠孝審査委員長ほか5人で審査委員会を開き決定した。道内の自然保護、野生生物保全に頑張っている団体・個人の活動を広く応援している。助成対象事業の実施期間は原則1年間で、年度末に報告書を提出してもらい、「モーリー」の事業活動報告に掲載

している。

**(2) 北海道新聞エコ基金プロジェクト** 決算額 0円 (予算額 160万円)

北海道新聞社営業局が主体となり、北海道新聞紙上の広告展開による収入を原資にエコ大賞などを顕彰してきたが、事業に必要な資金を広告収入から得るのが困難な情勢になったとして営業局が中止を決め、実施を見送った。

**【調査事業】**

**\*フラワーズン 2017** 決算額 900万円 (予算額 800万円)

5年に1度行っている全道一斉の花の調査「フラワーズン」を北海道新聞社創業130周年、北海道新聞野生生物基金の設立25周年記念事業として6月17、18の両日に開催した。1997年から始まり5回目。エコ・ネットワーク代表の小川巖さんが実行委員長を務め、道内16地域別の説明会を開くなどして準備を進め、参加者を募った。過去最多だった前回2012年の約3100人に迫る約3060人が参加した。北海道新聞社が150万円の負担金を拠出したほか、日本郵便の年賀寄附金配分で約72万円の助成を受けた。

**◇その他の事業 (一般会計)**

**(1) パンフレットなどの作成** 決算額 14万円 (予算額 10万円)

野生生物基金の活動を紹介するリーフレットと寄付金の振込手数料がかからないゆうちょ銀行の振込用紙を増刷した。フォーラムや出前講座などで配布した。

**(2) ホームページの維持・更新** 決算額 22万円 (予算額 10万円)

基金の活動を広く宣伝・紹介するほか、助成事業・写真コンテストの応募用紙のダウンロードなど、事業の推進にも役立てている。

**(3) HoBiCC 連携事業** 決算額 0円 (前期 10万円)

HoBiCC (北海道生物多様性保全活動連携支援センター) は北海道環境財団、道総研環境科学研究センターと当基金の3団体で2014年4月に設立した。2017年度は特定外来生物のセイヨウオオマルハナバチの駆除イベントを恵庭市で5月に開催するなど啓発に努めたほか、北洋銀行ほく一基金の北海道生物多様性保全助成制度の事務局を担った。一方で大口寄付や繰越金があり、当基金からの運営費拠出は見送った。